

戊辰の動乱を駆け巡った 遠藤七郎昭忠!



1839(天保10)年、葛塚の庄屋の遠藤家に生まれました。1864(元治元)年、父 国忠の死去により家督を

継ぎました。

全国の勤皇の志士と交流した七郎昭忠は、1868(明治元)年の北越戊辰戦争では、自ら農民を組織し「北辰隊」を結成し、隊長となります。長州干城隊に所属し、会津軍攻撃や佐渡の警護にあたりました。翌年12月、その功績が認められて「土籍(武士)」となり、一代限り苗字帯刀が許されました。1870年9月、東京警護の任を解かれ、隊を解散して帰郷しました(61ページ参照)。

帰郷後も、部下の生活を惜しまず援助したと伝えられています。

また、村杉温泉に逗留すると、設備の革新的な改善を指導、実行しました。1875(明治8)年、源泉近くに共同大浴

場を完成させ、今日の村杉繁栄の基礎を築いたといわれます。

しかし、翌年10月、前原一誠が政府に対して「萩の乱」を起こすと、前原との関係を疑われました。そのため11月に投獄され、12月には東京に護送され、懲役50日の刑を受けました。

1878(明治11)年、明治天皇の北陸巡幸のときには、新発田の行在所でほかの北辰隊隊員と共に天顔奉拜の機会を与えられました。

その後は詩文と筆と酒を友として、諸国を遊歴します。1882(明治15)年に約5年の旅を終え帰郷すると、有志が無事を祝い、大書画会を開催しました。92名の文人墨客を招いて開かれた会は、町としては未曾有の盛会だったといわれています。「甘雨」と号した昭忠の作品が、今も多く残されています。

1892(明治25)年、東京麻布で亡くなりました。54才でした。のち1928(昭和3)年、明治維新での功績に対して従五位が贈られました。開市神社境内には「贈従五位遠藤七郎先生顕彰碑」が建っています。



墓(嘉山・稲荷浦)



顕彰碑(開市神社)
1968(昭和43)年建立

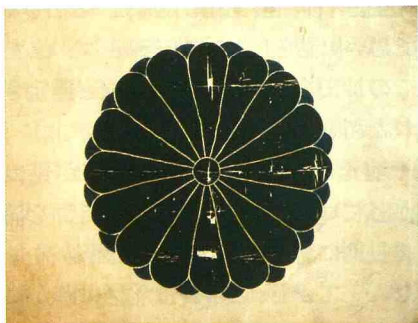
MEMO

前原一誠(1834~1876)

長州藩士で、松下村塾に学び、戊辰戦争に参加。明治初期には政治家として活躍するものの、のちに萩の乱を起こし、処刑されました。

■ 北辰隊

北辰隊は下興野新田(葛塚)の庄屋遠藤七郎によって組織されました。「北辰隊」という名前は戊辰戦争の後、長州藩士 前原一誠(まえはら いっせい)によって付けられたとされています。隊員は、出身の分かっている152名のうち星野帰一(かへい)、越三作(こしざん)(斎藤治忠)など下興野新田の人が82名、嘉山(かやま)の人が3名など葛塚周辺の人が過半数を占めていました。



北辰隊 隊旗 (市指定文化財)

1868(慶応4)年6月、この遠藤率いる農民隊が初めて記録に現れます。新発田藩主が奥羽越列藩同盟に従う意志を表すため、下関(関川村)に出陣していた米沢藩主を訪問することになった時のことです。藩主が米沢藩の人質となることを恐れた多くの農民・町民はその行く手を阻止しました。この時に最も活躍をしたのが遠藤の率いる農民隊で、その数は

1,200人だったとも伝えられています。

7月、新政府軍が太夫浜・松ヶ崎浜に上陸すると、直接松ヶ崎へ出かけ、長州藩千城隊(かんじょうたい)に所属しました。

8月1日に新潟で戦い、14日の角石原(かどいしはら)(新発田市)の戦いでは先鋒隊として会津軍と激しく戦いました。この戦いで遠藤率いる農民隊は4名の戦死者と重軽傷7名を出し、隊長の遠藤自身も軽傷を負いました。

戊辰戦争後の11月、北辰隊は佐渡に渡って、守衛などにあたり、翌年8月に葛塚に戻りました。また、1870(明治3)年2月には、上京して第三遊軍に編入され東京の警護につきましたが、9月に解隊が認められ、全員帰郷しました。

その後、北辰隊は警察的な用務にかり出されることはありましたが、明治新政府の官吏として採用されることはありませんでした。



小隊旗と肩章など (市指定文化財)